

こども 教育 文化

第20号

もくじ

1年生 今日も元気いっぱい わたしの出会った子ども	芳賀 淳志：1
海辺の小さな小学校の子どもたち	浅井 時子：6
先生、勉強しなさいね	高橋恵美子：7
宮城の教師 ³	
子どもと授業に生きた教師 八島正秋	：8
1部 門真 隆 春日 辰夫	
2部 林 由貴 高橋 建 阿部 誠喜	
佐々木光一 林 和人	

1年生 今日も元気いっぱい

芳賀 淳志

1. 待ちに待った1年生の担任

教員になって8年目、私はついに1年生の担任をすることになりました。待ちに待った1年生担任。どうしてそんなに1年生の担任をしたかったのか、それにはいくつか理由があります。その中で一番大きな理由は、大学時代の学びにあります。当時、大学生だった私は、埼玉県の小学校教諭だった霜村三二先生の教室（低学年）に向いて教育実践について学んでいました。その教室で、子どもたちが伸び伸びと楽しく学ぶ姿、教師が子ども

もたちとの日々の出来事を楽しみ、語る姿、保護者が担任を信頼し、子育てを楽しむ姿を目の当たりにしました。私は「あんな教師になりたい。」「いつか1年生を担任してみたい。」と思うようになりました。

今回の1年生は2クラス。2組担任の荒井先生、児童支援担当の小野寺先生と3人で学年を組みました。「子どもたちに学校って楽しいと思っしてほしい。」「不安いっぱいいな保護者にも安心してもらいたい。」という思いを共有し、1年間がスタートしました。

2. 「俺、帰る」というAくん

入学式の次の日、楽しみな気持ちと共に、不安を抱えながら子どもたちが登校してきました。入学式当日は家の人が一緒でしたが、この日からは子どもだけでの登校になります。2時間目がまもなく終わろうとした頃、一人の男の子が突然席を立ちました。「先生、俺帰る。」Aくんです。ランドセルロッカーから慣れない手つきでランドセルを持ってきて、机の中の物をランドセルに詰め始めました。私が、「帰るって、急にどうしたの?」と聞いても、片付けの手を止めません。「お母さん、おうちにいるの?」と聞くと、Aくんは「ママは仕事。」と答えます。Aくんはその日、児童館へ下校し、お母さんが児童館に迎えに行くことになっていました。Aくんは続けます。「いいの、4になったらおうちに帰るって、ママと約束したんだから。」「4? あれっ、もしかして……。」私は時計を見ました。時計の針は10時20分。たしかに4を指しています。「Aくん、それ長い針じゃなくて、短い針が4になったらじゃないかな。」という私の説得をよそに「いいの、4だから帰るの。」とAくん。その後は、補助に入っていた児童支援の小野寺先生がAくんと話してくれました。きっとAくんは、2時間目までの間、ずっと「おうちに帰っ

て、早くママに会いたい。」と欲していたに違いないありません。そんな中、慣れない環境に不安を抱きながら、席に座っていたのでしよう。

3. 初めての授業参観

アンパンマンはBくん?

4月20日。子どもたちにとつて、小学校での初めての授業参観。この日は、ひらがなの『あ』の学習をしました。その日のことを、学級通信に記しています。

『一の学級通信』やってみよう!

No.9 4月23日(月)

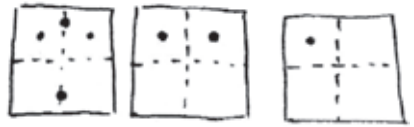
イメージをつくる 腕を振り、歌いながら

ひらがなの学習を、文字を書くためのトレーニングにはしません。ひらがな遊びとして、言葉遊びや人と関わる遊びを取り入れます。

「あゝのつくものなんたらなく♪」子供たちと手拍子をしながら歌います。

「あり」「あめ」「あめんぼ」「あんど」「あるぜんちゃん」「あかしろぼうし」「あいすくりいむ」「あき」

「あ」のつく言葉を考えているうちに、早く「あ」を書きたくなってきた子供たち。「あ」は、とても形のとりにくい文字なので、まずは形のイメージを持つことが大切です。



「点は、どこにあるでしょうか?」

この問いかけに子供たちは、「一の部屋の真ん中。」と答えます。

次に点を増やしていくと、

「二の部屋の真ん中。」

「一と二の部屋の間。」

「その上の方。」

それらを線でつなぎます。

「あれあれ? あれは……」

私は窓の外を指さして、声をあげます。子供たちは一斉に外を見ました。

「あれあれ あれは アンパンマン?」

「あ」の中に、アンパンマンの顔を見てとつての、ひらがな遊びです。「の」の中にアンパン

マンのイメージを重ねてみます。大きく腕を振りながら、声に出して空中書きします。すぐに紙に字を書くようなことはしません。口で唱え、腕を振る。それらを十分に行うことから始めます。金曜日



日は授業参観だったので、大人の背中も借りて「あ」を書き、それから紙に書いていきます。

アンパンマンはBくん?

授業中、アンパンマンが登場しました。マントの下の服がたまたまBくんと同じ服だっ

たので、子供たちは「Bくんだ!」と言っているのです。しかし、さすがBくん。「みんなも勉強すれば上手に『あ』を書けるよ!」や「ほくだけアンパンマンに会えなかった。」など、私の期待以上の役者ぶりです。いいなあ。『あ』のイメージを持たせた子供たち。次回はお手本に近づけるように学びます。

3月に「1年生で一番楽しかったことは何?」と子どもたちに質問したところ、この授業と答えた子が何人かいました。アンパンマンのお面をBくんに被せての授業。多くの子どもたちの記憶に残ったようでした。授業をいかに魅力的で、楽しいものとするか、それが大切だと改めて気付かされました。

4 「大丈夫。なんとかなる。」

この『あ』の授業をしていたとき、「ママ探してくる。」そう言って教室を飛び出したのはAくんでした。その1分後、反対側からAくんのお母さんが生まれたばかりの娘を抱いて、教室にきました。Aくんがいけないことに気付き、心配そうなお母さん。懇談会で心の内を話してくれました。「Aは元気がよすぎて、私の手には負えません。」だいたい悩んでいるようでした。「お母さん、大丈夫ですよ。なんとかなりますから。6年生になったとき、お母さ

ん探してくるゝって廊下に出ることないです
から。長い目で見ていきましよう。」と私は声
を掛けました。他のお母さんたちも頷きなが
ら聞いてくれていました。悩みを口にしたこ
とで、お母さんも少し楽になったようでした。
この「大丈夫」という言葉は、お母さんを安
心させるための「大丈夫」でもあり、初めて
の1年生担任で不安だった自分に言い聞かせ
ていた「大丈夫」だったように思います。

5. 「ママに電話してくれる？」

5月に入り、家庭訪問がありました。Aく
んの家にはお母さんだけでなく、お父さんも
待つてくれていました。お父さんは生まれた
ばかりの娘を抱えています。Aくんが普段か
ら教室を飛び出してしまふこと、運動会の練
習にはみんなと一緒に参加できていないとい
うこと、友達に悪口を言うなどのトラブルが
多発していることは、普段から連絡を取り合っ
ていたため、お母さんも知っています。お父
さんもお母さんから話を聞いていたようで、
心配しているようでした。「どうしても怒るこ
とが多くなってしまうって。」二人同時に
は怒らないようにして、Aがどちらかには逃
げられるようにしているんだけれども……な
かなか難しくして。」とお父さん。「4月当初に
比べれば、学校に少し興味を持ってきたよう

だ。」とお母さん。Aくんの課題を共有しつつ、
Aくんが前向きに家でも学校でも過ごせるよ
うにしようとして三人で話をしました。「少しでも
Aくんが頑張ったときは、たくさん褒めてあげ
ましょう。学校でもそうしますから。」とい
うことで家庭訪問は終わりました。

それから数日たったある日、授業中にAく
んにこう話しかけました。「Aくんいつもより、
みんなと一緒に勉強頑張っているね。この時
間最後まで頑張れたら、お母さんにも電話し
て教えてあげたいな。」すると、「本当に、電
話してくれる？」とAくん。私は「約束するよ。」
と返しました。

その日の放課後、お母さんに電話をしまし
た。「今日の算数の時間、みんなと最後まで頑
張れたんですよ。褒めてあげてくださいね。頑
張ったらお母さんに電話してあげるよと言っ
たら、頑張れました。」だからか。帰ってき
てからずっと、先生から電話来た？ って言っ
てくるんです。「Aくんのお母さんもなんだか、
うれしそうです。Aくんはおうちの人の人に褒め
てもらいたいという気持ちが他の子よりもと
ても強いようでした。」

次の日、Aくんが言います。「先生、今日
も頑張っていたら、お母さんに電話してくれ
る？」うん、いいよ。電話してあげるよ。」きつ
と昨日お母さんに褒めてもらえたんだねAく

ん。

子どもたちにとってお父さん、お母さんは
特別な存在です。お父さん、お母さんに褒め
てもらえることが、子どもたちの生きがいと
言っても大げさではないと私は思っています。
最近では共働きの家庭が多く、仕事と家事でいっ
ぱい忙しい保護者がほとんどです。私も
その一人で、毎日を生きることです。精神一杯です。
そんなとき、自分の子どもが言うことを聞か
なかつたり、悪い事をしたりしていたら、保
護者もいっばいいっばいになって当たり前で
しょう。そして、子どもも「俺なんて。」と思っ
てしまつても不思議ではありません。Aくん
のお母さんとは、この後も連絡を取り合いま
した。もちろん悪いことも、良いことも。そ
して、Aくんを励ましていきました。

6. 子どもの心を愛で満たして

Aくんに限らず、1年生の子どもたちは、
お父さん、お母さんに甘えたい盛りです。し
かし、弟や妹がいる子たちは、どこかで自分
の気持ちを我慢している様子が見られました。
そこで、私のクラスでは、にこにこルールッ
トというものを作りました。何かというとうと、
先生や友達に「頑張っているね。」などと褒め
られたときにシールを一つもらえ、シールが
10個たまると、帰りの会で私が作ったオリジ

ナルルーレットを回せるというものです。ルーレットの項目は次の通りです。

- ① だっこしてもらえ
 - ② おんぶしてもらえ
 - ③ 肩車してもらえ
 - ④ 好きな遊びで先生と遊べる
 - ⑤ 給食おかわり優先券
 - ⑥ 先生のサイン入り写真
 - ⑦ スペシャルなんでも券
- (好きなものを選ぶ。)

子どもたちに人気なのは、肩車券です。(先のサイン入り写真も意外と人気。) 子どもたちからのリクエストもあり、クラスでさようならの挨拶をしてから、肩車で校庭を歩きます。4月当初は軽かった子どもたちですが、1年間で体がどんどん大きくなり、最後は体力に自信があった私もきつくなりました。それでも、「ぼく重いから……。」と遠慮している子を見ると、「先生平気だよ。ほら、乗りな！」と言ってしまおうでした。私が好きな時間があります。それは、一人の子どもをおんぶや肩車して校庭を歩いていると、たくさんの子どもたちが隣と一緒に歩いてくる時間です。みんな笑顔で、かわいいなあ、素敵だなあと思います。

懇談会でも保護者の人たちに次のようなお願いをしました。

「1日1分お子さんを抱っこしてあげてください。今日も頑張ったねって頭をなでてあげてください。子どもたちは、まだまだ抱っこやおんぶを求めています。1日1分だけ、座って抱っこでいいです。きつと子どもたちの心は愛で満たされるのではないのでしょうか。子どもの問題行動たつてきつと減りますよ。」

7. 子どもを変えようとしないうこと

夏を過ぎてもなお、Aくんが起こすトラブルは減りませんでした。学校の中だけでなく、下校中に地域の家にいたずらをするこもありませんでした。そこで私は大学時代からお世話になっていた師匠の霜村三三先生に連絡をし、相談しました。すると、霜村先生は私にこう言いました。「子どもを変えようとしないうこと。」私はどきつとしました。子どもの気持ちに寄り添うのではなく、「もつとこうなつてほしい。」という思いが溢れ、最近指導が厳しくなつていたなと自分を振り返り反省しました。Aくんの行動の根っこにある気持ちを考える余裕をなくしていた自分がいたように思います。教師が子どもへのまなざしや見方をやらかなものへと変えると、子どもとの関係もやわらかなものとなります。教師や学校が求め

る枠におさまらない子どもたちを「しっかりとさせなげや。」と教師が力むことが、むしろ子どもたちとの関係を悪化させることがあります。「子どもを変えようとしないうこと。」こう考えることがAくんとの日々には不可欠でした。秋になると、Aくんは教室を飛び出すことがなくなりました。みんなと一緒に参加できないでいた体育の授業にも参加できるようになりました。ドッジボールをしたり、なわとびをしたり、とても楽しそうに取り組みました。

年が明けた1月。体育の授業でキックベースボールを簡単にしたボールを遠くまで蹴る学習をしました。以前までなら自分の順番を待てずに好き勝手にボールを蹴るのではないかと心配していましたが、この頃になると、自分の順番を守ることもできました。子どもたちに遠くにボールを蹴るためのこつを教えようと、Aくんも力いっぱいボールを蹴りました。

ある日の試合中、ホームランを打ったAくん「すごいね、Aくん。ボール蹴るのすごく上手だね。」と声をかけると、Aくんは誇らしげな顔で私に言うのでした。「先生知らなかったの？ 俺、サッカー得意だから。」周りの友達とホームランを打って喜んでいるAくんの姿は、忘れられません。

8. 「頑張っているのが分かりました。」

2年生への進級が迫った2月下旬。最後の授業参観がありました。今まで学習してきた成果を子どもたちが発表する授業です。Aくんもみんなと一緒に跳び箱を跳んで見せたり、歌を歌ったりしました。途中でお父さんとお母さんが数分間お姉ちゃんの教室に行つてしまつと、Aくんは「俺も行つてくる。」と教室を飛び出そうとしました。そのとき、4月に教室を飛び出して行つたAくんの姿が私の頭をよぎりました。しかし、Aくんは廊下に出ようとした瞬間、体の向きを変えて自分の席に戻つてきました。そして、最後まで授業に参加しました。Aくんが我慢した、その姿は1年間のAくんの成長と言つていいでしょう。私はうれしくてたまりませんでした。

しばらくすると、Aくんのお父さん、お母さんは再びAくんのいる教室に戻つてきました。授業の最後「おうちの人に、今日の感想を聞いてみたい子はいませんか？」と1年生の子どもたちに尋ねると、Aくんが勢いよく手を挙げて言いました。「パパに聞いてみたい。」私がAくんのお父さんを指名すると、お父さんは「心配していたけど、学校で頑張っているのがわかりました。この調子で頑張れよA。」

と言つてくれました。うれしそうなAくん。それを見ていた他の保護者の人たちからも自然と拍手が起りました。

9. 支えてくれた教師たち

今回はAくんととの出来事を中心に記載しましたが、1年1組には気になる子どもが他にもたくさんいました。正直に言うところ、私は毎日毎日悩んでいました。職員室で他の先生たちに悩みを聞いてもらう日が続き、たくさん励ましてもらいました。特に、児童支援で子どもたちと関わっていた小野寺先生と一緒に学年を組んでいた荒井先生には、励ましてもらうとともに、子どもたちの言動を振り返ったり、成長の様子を確認したりしました。

教師の仕事は簡単な仕事ではありません。子どもたちが置かれている環境、そして、保護者が置かれている環境は厳しさを増しています。それに伴って、教師という仕事も難しさを増しているように思います。そんな中で、教師が子どもたちと向き合っていくためには、教師同士の支え合いが必要不可欠です。1年間たくさんの先生に支えてもらったことで、私はAくんをはじめ、1年生の子どもたちと向き合えることができました。今度は自分が仲間の教師を支える、そんな教師になりたいです。

〈おまけ〉学級通信『やつてみよう』



運動会のことについて書いた学級通信。1年生の担任はハプニングが付き物。それが楽しみでもある。子どものかわいい姿を保護者と共有できたとき、私たち教師はまた元気になる。そんな気がしています。

(仙台・沖野東小)

海辺の小さな小学校の子どもたち

浅井 時子

初夏、毎年静岡から素敵な化粧箱に入ったふつくらと実った甘いマンゴーが送られてくる。今までは絵手紙だけでお札を済ませてきたが、今年は仙台名物牛タンに手紙を添えてお礼した。すると「お送りしたマンゴーは、才茂ファームの応援も兼ねて送らせていただいているので、どうぞ気にせずお願いします」との返事が届いた。Hさんの好意を無駄にしないように今後は注意したいと思った。

才茂ファームはYさんが経営するマンゴー農園である。苺や葉生菜栽培で同級生が頑張っている中、彼は農業の今後を見据えてマンゴー栽培に着手し、経営も少しずつ軌道に乗りかかっているという。Yさんを応援しているHさんの思いに胸が熱くなった。

新卒4年目。眼前に駿河湾が広がり、海の彼方に伊豆の山々が見渡

せ、春にはシラス漁の船団がしぶきを上げ、裏山の斜面には石垣苺畑が連なり、秋にはミカンがたわわに実る。近くには、家康を祀る久能山東照宮がある、正に風光明媚な海辺の小さな学校に赴任した。Hさんたちは4年生。初めての4年生で四苦八苦の連続だった。2クラスあり、1クラス28人で、学年が一つにまとまって、子どもたちは素朴でみな仲がいいのに、私だけが取り残された状態。特に男子は、訳もないことで私を怒ったり、全く授業を聞いていなかったり、大声を出したり、ノートも教科書も出さなかったり、私ほただただオロオロしてばかりだった。これでは授業も進まないし、今でいう週案のような日案を書いて校長に毎日提出して、まず自分の感情を書くことでコントロールすることにした。

当時、静岡市教職員組合は三つに分かれていた。若い者が第1組合

に入ることに圧力がかかり、前年度の校長は家にまで来て、母にも組合を脱退するように迫った。しかし、この年に赴任した校長は寛大な方で、組合に関して一切言わず、自主的日案に目を通し、必ずアドバイスを書いてくださり励みになった。

しかし、ある日大変なことが起きてしまった。私は自分の指導不足を棚に上げて、サッカー少年チームの指導の行き過ぎが、弱い私にそのストレスをぶっつけてくると思い込み、担当の〇教諭に男子の状態を言いつけた。彼は若く、正義感に燃えていたからであろう、私の教室に来るなり、有無を言わずAさんを殴りつけた。その途端Aさんは唇を切ってしまった、二人で謝罪に伺った。事の一部分始終を黙って聞いていた父親は、「〇先生、誠にありがとうございました。坊主のやんちゃにカツを入れていただきました」と、深々と感謝しているではありませんか。本当に自分の不甲斐なさを恥じた一件であった。

男子との困った状況を救ってくれたのは、家に届いたYさんからの手紙だった。
（先生、このことは絶対誰にも言わないでください。僕は先生のことか

好きです。きつと他の男子もみな先生のことが好きだと思います」と、私を困らせていた一人、Yさんからの丁寧な文字の手紙だった。何か私に被さっていた覆いが外されたような爽やかな気持ちになった。季節はすでに秋の声を聞くころとなっていた。

8年前の東日本震災の時は、8月に同窓会が開かれ、Hさんの呼びかけで励ましの寄せ書きと、農産物の支援物資が何回か送られてきた。私はそれを自転車に積み、仮設住宅に運んだ。住民の皆さんは一列に並んで押し懐くように受け取ってくれた。

あのやんちゃな子たちは大きく成長し、地域を守り、今でも愉快的仲間として繋がりをもち、お互いが優しい気持ちで支え合っている。

（仙台・元教員）



先生、勉強しなさいね……

高橋 恵美子

5年生担任。始業式の日、教室に入った。ほとんどの子どもたちは、私が教室の後ろに並べておいた『はだしのゲン』や『カムイ伝』等漫画本を読んでいた。「始めますよ」と呼びかけても誰も動こうとしない。その後も男子のトラブル・給食時冷凍ミカンの大きさを取り合い、話を聞かない。つっぱっているような男子もいた。今までにない集団だった。どうしよう……職員室で子どものことを話していたら、『生活指導サークル』を紹介してくれた先生がいた。藁にも縋る思いで、せつせとサークルに通い実践を聞いた。班・核・討議作りという集団作りを学んだ。子どもを見る視点や子ども同士の関わりを作る大切さを学び、集団ゲームの面白さを知った。子どもたちは班での活動や学習、取り組みなどに意欲を示し変化が表れた。

3学期になって女子が「〇君がエッチなことや変なことばかり言ってる」と何度も訴えてきた。私は懇談会で学級の様子の一つとして、このことを話したところ、「先生は何て言ったのですか?」と問われ何も応えられませんでした。性教育をしなければ!と突き動かされたようでした。早速、養護教諭に相談し、北沢杏子さんの本や資料を借りて、私なりに勉強し授業をした。変な話は聞かれなくなった。その後性教育は道徳か……と疑問が沸いてきた。また社会科の従軍慰安婦で立ち止まってしまう。そんな時、友達に『性と生の教育』のセミナーに誘われた。性は科学と人権であり自立と共生の教育だということ。私と『生活指導』と性教育の始まりである。

やはり5年生。女子の体育着がなくなったり、S君の体育着袋の中に針や「〇〇しないと命がない」のメモが入っていたり、上靴隠し等が集中的に起きた。その度、話し合いをした。S君は積極的に発言していた。国語の『大造じいさんとがん』の授業後に集めたノートに命を命と書いていたS君。S君のお父さんは単身赴任で母さんは病気がち。未就学の弟と妹がいた。時々S君は無断欠席をする。電話をしても出ない。そういう時は昼休みにカッパ麺や缶詰などを買い、玄関口に置いてきたこともある。どの事件も解決した。しかし授業参観後の懇談会で、「社会の授業ではなく、今は金八先生のように問題を話し合う授業を組み立てておくべきではないか」というような意見を言われた。そういう授業は全く考えていなかった私は、深く落ち込んだ。その通りだと思つた。S君は中学入学と同時に両親の実家のある北海道へ引っ越した。お母さんからたびたび元気で過しているかと葉書が届いた。

5年生のK君。算数の授業が終わり、教科書とノートを机の中にくぐじゅと突っ込むように入れて教室を出て行った。ああ、わからなかつたんだ、と思つた。今でもこのシーンが目につかび申し訳ない気持ちで胸が痛む。次の算数では復習を工夫した。K君のキラッが見えた。授業後「K君今日はどうだった?」「よかったよ」その後、K君は一つのバロメーターとなって私を頑張らせてた。

このクラスは『生活指導』に出会う前の子どもたち。児童会選挙がまだあつた頃。選挙の時、クラスは盛り上がり女子児童会会長が誕生した。次はこういうのがやりたい!とよく要求する子どもたちだった。

高2の春、6の2の教室を借りて、自分たちで企画運営したクラス会を開いた。終わると掃除をし、みんなてきぱき動いていた。校長先生にも挨拶していた。高校生だから当たり前なのかも知れない、が今の子どもたちと37年前の子どもの違いが違ふのだろうか。今になって思えることは、子どもたちのサインの一つは共通して、(先生、もつと勉強しなさいよ……)なのかもしれない。反省することばかりだが、子どもたち、保護者・仲間を支えてもらったおかげで楽しく仕事ができたと思つた。

(仙台・元教員)

子どもと授業に生きて教師 八島正秋

第1部 同時代の仲間から

八島さんから学んだもの

門 真 隆

■全員100点

少し手あかのついた言葉になってしまった感じもあるが、教える者にとっては、今なおいつかはなしとげた姿がある。八島さんを語ろうとするとき、やはりここから始めるしかないように思う。全員100点という状況を八島さんは具体的にどんな言葉で語ったか記憶が定かでないので、八島さんが『教育文化』96号、「主張」欄に書いた言葉の中から引用させてもらう。

数年前、出張で教室をあげた私のクラスに教頭が補欠に行った。5年生だった。分数の乗除の練習をしていたのだが、10題ずつ終わった子

のノートを点検したという。43名の子どもたちだったが、全員ただひとつのまちがいがいもない。教頭はふしぎに思い、改めて10題出したが、これもだれひとり、ひとつもまちがわなかったという。30数年の教師生活で初めての経験といって、彼は水道方式とわたしをほめちぎった。それは多分まぐれたと思う。わたし自身いつもそううまくはいかないのだから。

この話を聞いた時の驚きとوراやましさを今もはつきり思い出すことができる。6年教材を5年生で、しかも43人の子全員に100点をとらせたのだ。私にはまぶしすぎるような事実だった。

また、子どもたちのテストの答案を見せられたことがある。文章題だった。1枚1枚がどれもきちんと立式され、計算されて、少しも乱れていない。次の子はどうか、少しは雑なのが……、と思つて、次々と繰つていつても、どれも美しい答案だった。何枚かのまちがいはあったのだろうが、もうそれは問題ではなかった。

八島さんから学んだものは数多くあるが、ここでは、このことを中心に述べたいと思つ。

■どうやって

そこまで高めることができたのか

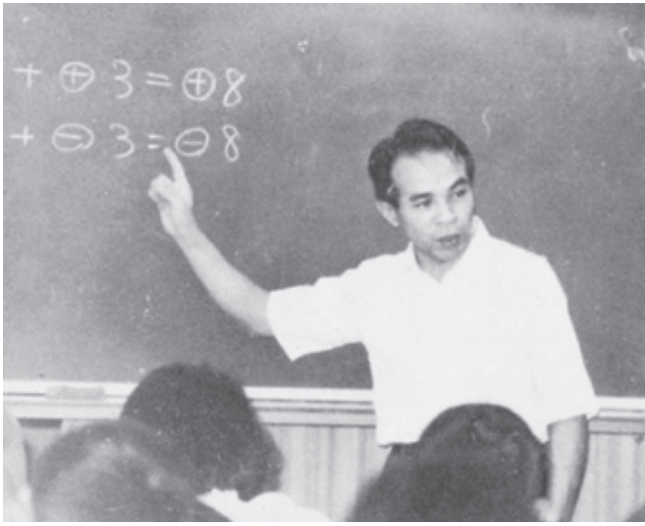
「全員にわからせるんだ」

極端に言えば、わかる子は教えなくたってわかる。高学年になると算数など自分で何十ページも授業より先に進む子が学級に何人かはいるものだ。だが、一方、教えてもなかなかわかつてくれない子がまた何人かいることも、普通学級の事実だ。何回教えてもわからず、さじを投げたくなるものなのに、それをどうしてどの子もわかるように育てていったのか。その時その時に話してはくれて

いたが、八島さんが最後に書いたものが、はしなくもその具体的な姿を描いているので、それを語ってもらおうと思う。

— * * —

当時2年だったゆみちゃん（注4月転入）は、くりあがりのある2桁のたしざんがどうしてもできない。38+24の答が何度教えても52になってしまふ。くりあがった十の位の1がどこかへ消えてしまふのだった。1の位の8+4はできるのだから、どうにかなるはずだと思っていた。放課後残して教えるのも今日で5日目だった。「全員わから



せるんだ」という意地で、その日は残してみたものの私はもう半ばあきらめかけていた。（このあと、タイルの操作と、それに結びつけて筆算形式を教えて）「わかった？」と聞くと、ゆみちゃんはコックリとうなずくのである。そこで問題を与えるとまたまた十の位が1だけ少ないのである。こういう日が4日も続いたのだから、私もホトホトあきれて、「ゆみちゃん、きょうはもう帰ってもいいよ」と無然とした顔で帰すのだった。ゆみちゃんもまた、黙って赤いランドセルを背負って帰っていった。ゆみちゃん、サヨナラは？」と言って、チラッと私の方を見るだけで黙って帰って行くのだった。

（ところが、このゆみちゃん、八島さんが偶然やった、ちびタイルをのっぽタイルととりかえず、十をゼロハンテープではりつけてくりあげてやるという操作でわかるのである。）

……ところが今度はなんと5題ともできていたのだ。私は思わず「ゆみちゃん、できたよ！100点だ！」と言って、大きく100点と書いてやった。ゆみちゃんも初めてかすかにニコツとした。「ゆみちゃん、もう5つやってみる？」というニコツクリした。二度目の5問も全部正解だった。「ゆみちゃん、よかったね。とうとうできたよ。おかあさんにもこのことを教えてやるんだよ。さあ帰ろう。」と言ったら、ゆみちゃんはランドセルにノートをしまい、自分の席にもどっていった。私もタイルを片

づけ始めた。するとどうだろう。ランドセルを背負ったゆみちゃんが私のところまでもどってきたと思ったら、「先生サヨウナラ」とおじぎをするのだった。ゆみちゃんもきつとうれしかったのだろう。その日、私はとつてもうれしかった。

— * * —

長い引用になったが、この中に「全員100点」に至る八島さんの姿勢と長い道程がうかがわれる。容易な道ではなかったのだ。

■「子どもの考えに学ぶ」

この事例を読んで、私はもう一つ学んだ。この項に八島さんは「子どもの考えに学ぼう」と見出しをつけている。前掲の「主張」の中で、「子どもの認識のしかたに正しく沿った……」といっているのは具体的にはこういうことだったのだ。「まだわかんないの」と言いながら、またぞろ同じ説明を始めてしまう私は、子どもの考えに深い注意を払う、そこから指導を組み立てようとしている姿勢に心をうたれる。簡単なことのように実は大変むずかしいこのことの大事さを、やっとわかってにっこりしたゆみちゃん的笑顔の中から認識したのだろう。「サヨナラは？」と言われても、チラッと見ただけで帰っていったゆみちゃんが、わざわざ八島さんのところまで来て、「先生サヨウナラ」とおじぎをするように変わったという事実は、わかることの大切さを語ってまことに象徴的に思える。

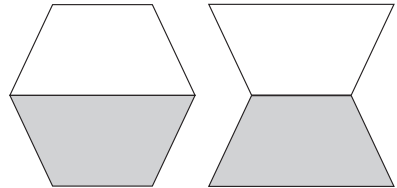
■「まず、本質的なもの、基本的なものを」

島小学校（群馬・編者注）の実践に激しくゆさぶられていたころ、赤坂里子さんの「 $143 \div 6$ 」の指導記録を読んだ。そして、その中で子どもたちが実によく考え、自分たちなりに3桁÷1桁の方法を見つけ出していることに心をうたれた。そして私もそんな子どもにしたい、そんな授業をしてみたいと思った。

私は分数÷分数でそれをやろうと思った。どの帯分数もみな仮分数に直すのではなく、分子や整数部分が割り切れるのは割る。割れないのだけ仮分数に直せばいい。いろんなタイプに応じて計算方法を考えさせたい、そんな授業はどうかと八島さんに話した。

だが、八島さんはいいいとは言ってくれなかった。分数÷分数の基本的な形から入れば、どの子ども、どのタイプの計算にも対応できる。力の弱い子はいろいろなタイプをいちいち見分け、それに対応する方法を持つのはむずかしいというのだった。私は納得せず、島小でもやっているんだけどなあなどと未練がましく思ったか言ったかしたような気がする。そして、また同じようなことをやった。台形の面積の求め方の時である。多くの子がいろいろな等積変形から方法を見つけていった。それらをもとに、「(上底+下底)×高さ÷2」という公式を導き出した。中には図Aというのまであった。私はほめ、その子たちも一つの方法を見

図 A



まっで、ついには自分からこの方法ではだめだと言いついてしまった。この時私はどめをさされたような思いがした。

赤坂さんの場合、真摯に計算方法を追求させた結果として出てきた多様さであり、その一つ一つは「 $143 \div 6$ 」の意味を理解させていく一助となるものだったのに、私の「いろいろな方法を考える」ことに夢中になってしまったのだ。それ自体に価値をおいてしまっていた。自由な思考、多様な考えは何のために必要なのかわかっていなかったのだ。

島小の実践にしきりに感心していた八島さんが、私が島小のまねをしても少しも動じなかった。八島さんには「どの子にもわからせるには、本質的なこと、基本的なものをまずきちんとつかませなければならぬ」ということが実践の中で確かめられていたにちがいない。だから虎の威を借る

狐が何か言ってもおかしかった、ただだろう。だが八島さんはだめなことを一生懸命説明してくれた。

■信頼できる子どもをつくり出すことによつてしか、本当に子どもを信頼することはできない

信ずるものを持たない者は動揺する。日々変化する子どもの姿に一喜一憂し、そういう子どもと自分に幻滅することのくりかえしで過ごしてきた私は、教師としての適格性がないのではないかと思うことがたび重なった。私とていくらかの努力はした。だが「いい学級」とはいつもどこかでありがちがっていた。何がそうさせるのか、ずいぶん考えた。参観も読んだ。だがわからなかった。今でもよくわかったわけではない。でも、これではないかと思っていることがある。

それは、ゆみちゃんに八島さんがしたようにすればいい。適格性などと考えるひまがあつたら、「ゆみちゃん」を見極め、「ゆみちゃん」に焦点を合わせ、「タイトルにゼロハンテープをはった」ようにして教えればいいということだ。「ゆみちゃん」がわかるということとは、ほかの子が「より深く理解できる」ということだし、その中で子どもはゆみちゃんのように変化し、「いい学級」として成長していくだろう。そのことを信ずる以外にないと思つている。八島さんが「今度の子どもは前のクラスに比べておもしろくないし、力がない」と言つたことがある。すると、そばにいた奥さんが、「前の組の時

もそう言ったよ」と言った。その言葉を聞いた時、私ははっとした。前のクラスとは、あのすばらしい答案を書いた学級だ。八島さんは「さっぱりおもしろくない」ところから出発してあのすばらしい子どもたちを作りあげたのだ、信頼できる子どもを作ることによってしか、子どもを信ずること

はできない。群馬の川野理夫さんが言った「子どもに対する強烈な人間信頼」を、事実として私につきつけ、それにはこうするのだよと教えて八島さんは逝ったのだ。

(宮教組機関誌「教育文化」1999号)

1982年6月発行から転載

いい学校は、いい授業でしかつukれない

春日辰夫

亡くなる1週間前、吐血・けいれんの激しかった直後見舞ったときの八島さんの顔は、さすがに

疲れはてていた。「そんなことで驚かないで、がんばらないとだめだよ、八島さん。」という私に、「がんばられたって、何にしがみついていけばいいんだ。しがみつくものが何もないんだ。」という返事。返すことがないのだったが、早くわれわれの元にもどってほしいおもいはどうしようもなかった。告別式の後、枕元のケースの小さな引き出しから、なんと12月30日に書いた、奥さんたちへの別れの手紙が見つかった。亡くなる3ヶ月前に書いたことになる。見舞うたびに、ただ「がんばって」ただけ言っていたことばを、八島さんはなんと聞

いていたのだろう。

流動食だけ、しかも、自分ののどを通すこともできなくなっても教育を考えること、子どもを考えることは続いていた。林竹二著「今授業を考えなければ子どもは救われない」が出たことを伝えると、「読みたい」と言い、自分の授業との関わりで読後感を話す。また「現代教育学」の「林竹二の授業論をめぐって」を読んでは、林先生の、授業に対する積極的な提案をストレートに受けとめず、誤解と偏見に満ち、憎悪さえこめて書いている編集者を含めた数人の書き手について、激しい怒りをこめて語り合いました。極地方式のテキストを病床に見たのも何度かあった。

かつて西多賀ベッドスクールにいたことのある八島さんは、よく言っていたものだ。「明日死ぬかもしれない子がいる。それに算数教えてなんにならという考え方がある。どんな子にも学ぶ権利がある。教師であるオレは、当然その子にもきちんと教えなければならぬ」。この考えは、病床にあつて、そのまま自分の学ぶ権利に通じていた。

八島さんとの別れの日、荒町小の6年生は、八島さんとの算数の授業を語った。八幡時代の教え子も。算数にかけた八島さんは、確実に子どもたちに算数を残したが、それだけではなかった。算数の授業が一人ひとりの子どもをつくった。算数の授業がいいクラスをつくった。でも算数だけに力を入れたのではない。算数の目がそうさせたと言えるかもしれないが、あらゆるものに食欲であった。理科では極地方式テキストの積極的使用者だったし、民舞の学習会で小さな体に汗して踊る八島さんでもあった。原爆詩集を手に平和の授業を語ってくれたこともあった。

こんな八島さんが、今の学校の姿を嘆き、あるべき学校の追究に意欲的だったのも当然だ。組合の会議、サークルの集まりの帰り、八島さんの車に便乗する私は、よく、今日の授業のこと、子どものことを聞かされた。「いい学校は、いい授業でしかつukれない。いま、本当にわかる授業の創出に、学校が、あげて取り組んでいるであろうか。そんな学校が身近にないから、学校を決定するのは授業だと言つてもわかつてもらえない。自分たちの

手で、こんな学校をつくりたい。」というくり返しの語り合いの中から生まれたのが、「学校研究会」であり、その発展としての「夏の学校」であった。

「第1回夏の学校」は1974年の夏であったから、今から8年前になる。八島さんは元気であった。予想をはるかに越える希望者に驚き、マスコミの大きな反響にとまどいながら暑い夏の5日間は終わった。茂庭荘に集まった子どもたちが帰り、仲間の職員が帰ったあと、夏の学校の事務局を担当した私たち3人（斉藤敬一さんと「終わったなア」と顔を見合わすのだった。3人にとって死にもぐるいの5日間だった。ただの5日間といえども、わかる授業が中心にすえられた学校がすばらしいのだという事実をつくりたかったのだから。「オレの家でビールでも」という八島さんの誘いに、疲れ果てた私たちは、日を改めてということにして別れた。家に帰って、1本のビールで倒れこむように寝てしまったことを語り合ったのも、今は思い出として残る。この夏の学校を八島さんは、記録集で次のように語っている。

私にとって「教師集団」とはなにだったんだろうか。よく気軽に使ってきたコトバだったが、この学校に参加して、はじめて、その意味がわかりかけてきたような気がする。個々の教師が何人が集まっても、それがよく組織されていなければ教師集団とは言えない。それがたとえ、今回の「夏の学校」に参加したような教師の集まりでも、やはり、この人々の集まりに対

して、私は「教師集団」と呼ぶことにためらいを感じる。

第1回職員会の中で、Oさんが「学校では、校長と教師集団、学校と理事者、教師相互の緊張関係が、いつもなければならぬ」と発言されていたことの意味も、体験的にわかってきたような気がする。この「夏の学校」に、それがほとんどなかったといったら言いすぎだろうか。たとえば、第1日目に、EさんやTさんが、5年生の子どもたちをグイグイと組織していき、それぞれの係になった子どもたちが、初日から活動を始めたことについて、それはなぜなのかを、やはり、私たち教職員全体のものとして討議すべきであったろう。

「夏の学校」の趣旨を解し集まった人々の集団であれば、自己に厳しく、同時に仲間とも仕事の上での緊張関係を持っていけるはずだ。そのことで、授業や学校が相当追究できるはずだと思っていたが、ことは、そんなに甘くなかったのである。

「第2回夏の学校」では、事務局の仕事をやっているが、八島さんは5年の算数の授業をも担当した。第1回の授業にやや不満を感じていたこともあって、自ら授業者となったのである。私たちの目にはすぐれた授業であったのだが、あとで次のようなことを書いていた。

この授業を通して、子どもが抱いているだろう「むずかしい」「きらいだ」という思いをなくしてやりたい……。そんなねらいを持つてのぞ

んだのだが……。結論を先には言えば失敗であった。（中略）

こうした意味で、やってみてわかったことであるが、やはり、教材研究の不足があったと反省している。教材に問題があったり、シエーマの問題があれば、それは直ちに変更しなければならなかった。短い夏の学校では、それは不可能でもあった。正直いって私は、授業を捨てていたといってもいい。子どもたちが授業にのってこなかったのは、それが最大の原因だったと思う。事前の教材研究が不足していたことが決定的であった。

本当に授業に厳しい人であった。

その後「夏の学校」は5回までつづいた。3回目から、教頭の仕事を八島さんがやり、学校づくりのためのいろいろな提案をした。子どもたちに喜ばれ、父母に称賛された「夏の学校」ではあったが、たくさんの課題を積み残したままになった。授業がつくり出す学校、すぐれた教師集団によってつくりあげられる学校を夢見ながら、果たすことなく逝った八島さんの無念さを思うと、たまらなくなる。

（宮教組機関誌「教育文化」1999号）

1982年6月発行から転載）

サークルの継続・発展の礎

林 由貴

はじめに

少し前に、宮城の算数サークルを紹介する原稿を書いてほしいという依頼があった。サークルでその話をすると「八島さんって知ってる?」と『八島正秋の仕事―子どもと授業に生きた教師―』という本をいただいた。八島さんは、宮城算数数学サークル(旧仙台算数サークル)の生みの親であり、50歳という若さで亡くなっていて、その仕事をまとめたのがこの本である。

本を読み進める中で、授業実践をして仲間と検討をし、多くの原稿を書いて教材についての提案をしてきた先生であることが知った。本を読み、サークルに凄い先生がいたということを知ったが、読めば読むほど今の私につながることをばかりであることに気が付いた。

つながり(1) 面積の指導

マス目を数えるのではなく長さで面積を捉えさ

せる宮城の主張は、数教協の話し合いの中でなかなか受け入れられないのだとサークルで聞いていた。今年になって、私自身も「マスを数える方が子どもたちにとって面積を捉えやすい」という批判を受けた。しかし、教室ではこんなことが起きている。「分数でも体積の公式に当てはめて計算してよいのだろうか。」という話になった際に、「分数では1cmのマスがなかったので計算できない」という発言があったのだ。これはマスの数で面積を捉える指導の弊害であろう。このつまずきからも、

長さにこだわることには必要だと考えるが、これが、何十年も前に八島先生が実践されていたとは知らなかった。

つながり(2) 授業づくり

公開授業の依頼を受けることがあるが、私はその度にサークルで検討してもらっている。まずは教科書や参考になるものを調べ、正しく教材を捉える。その上で子どもたちの反応を予想しながら

授業を組み立てる。作っては直しを繰り返して、計画に何か月もかかることもあった。

『八島正秋の仕事』で、八島先生の授業案作成論としてこのように書かれたところがある。

指導案作成の過程

- A 教科書との相違点を明らかにすること
- B 実践記録に学ぶこと
- C 子どもの反応を予想すること

(細谷純・東北大学)
これは、今まさにサークルで行っていることである。

2015年11月に開催された数教協小学校集会では、宮城から二つの授業を提供した。このとき授業後に話題に上ったことがある。それは宮城の授業の「緻密さ」である。丁寧に授業づくりをしてきたことが、参観者に伝わっていた。そこには、サークルという大きな存在があった。

今のサークルに、八島さんの思いが確実に受け継がれていることを感じずにはいられない。そこで、依頼されたサークル紹介に次のような文章を書いた。タイトルは受け継がれてきたもの、受け継いでいくものへの思いを込めて『CONTINUE』好きな音楽家のツアータイトルからである。『八島正秋の仕事』には、八島さんの授業を観た方々が、興味深いことを書いている。少しだけ紹介する。

○八島さんの授業について

「子どもたちが自らの考えを述べ、さらに友達
達の立場に立つての意見を述べ、正しい数学
的な考えが一挙にはなく、じわじわと種々
の誤った考えを正しながら確立していく授業」

(山崎昇)

○八島さんの授業論『問い返し』について

『今、A君の言ったことの意味わかった？』
『今のB君の発言の意味を、Cさんからもう一
度言ってみて』正しい答えではない場合でも、
重大な意味が潜んでいると判断した時は、こ
れをやはり全員に戻してやり、みんなで考え
てもらいたいからだ』

(細谷純)

そこには、今、サークルで行っている宮城の授
業づくりの原点があった。お会いしたことのない
サークルの先輩や研究者。その思いは、共にサー
クルで磨き合った人たちによって、今、私のここ
ろまで届いているのだ。

「サークルは続けていくことが大切」だと、八島
さんも励まされた経験があるそうだ。私もまだま
だ、やっていける。そして、誰かにつなげていき
たい。

(数学教室 No.782・国土社)

この夏に新しい出会いがあった。

同僚が遠山啓の本を参考にしていると知ったの
をきっかけに、その方の恩師である大学教授にお
会いすることになったのである。その教授は細谷
純先生に学んだことを聞いていたので、細谷先生

とつながりのあった八島さんのことをメールに書
いた。すると、「八島さんを知っている方に巡回会
えた縁に、感動しておりました。ご存命であれば、
もしかしらら研究会などに参加させていただいて
いたかも知れません。」とのお返事をいただいた。
何年もかかってやっと繋がった気がした。

さらに、私の同僚にはこの教授の下でしっかりと
と学び教員となった若い先生が2人もいる。そし
てその先生は友人がサークルに顔を出してくれて
いるという繋がりもできた。若い先生方と、算数
について授業について話すと、とても充実した気
持ちになる。教材観や授業づくりだけでなく、人

面積の授業づくり

1 出会い

学生時代、教員の仕事は教科書の内容をしっか
り教えればよいという軽い気持ちで採用試験を受
け教員になった。初任地は山奥の僻地・本砂金で、
教員住宅はあったが、水道がなく、ポリバケツに
隣の住民からもらい水をしての自炊生活だった。

9月の土曜日の午後、支部教研集会があるとい

とのつながりもすべて八島先生が残してくれたも
のではないかと思わずにはいられない。私もしっ
かりと伝え、残していければいいと思う。

さて、この企画のおかげで久しぶりにサークル
の先輩方にお会いし、八島先生について語り、宮
城こだわりの実践についてもお話を聞くことがで
きた。そして早く授業がしたくなった。

このあとに先輩方がどんな八島さんを書いてい
るかがとても気になっている。じっくりと読みた
いと思う。

(川崎・川崎小)

高橋 建

うチラシをもらったので、どんなことをしている
のかぐらいで参加した。分科会の内容はほとんど
覚えていないが、会が終わったとき、助言者の八
島先生から声をかけられた。

「今からどちらに帰るの?」「仙台です」「仙台で
勉強会やってくるから、よかつたら参加しない?」

そしてそれから2年後、仙台勤務になり、組合

の用事で教育会館に行くこと、偶然にも八島先生と再会した。「仙台に来たのなら一緒に勉強しよう」とサークル例会の案内を渡された。私は2年前にわずか数時間しか会ったくらい若い若造を覚えていてくれたことに驚いた。

例会に参加してみると、ベテランの先生方が、この単元の問題はどこなのかなどを話し合っていた。教科書に問題があるなどと私は思ってもみなかった。「量の指導入門」という本を読み合わせしながら、何度目かの例会では、教科書とは違った授業案ができていった。

教材研究とはこういうことなのかと、初めて見聞きして、授業する楽しさが少し分かったような気がした。教科書の内容をしっかりと教えればいいという学生時代の考えは崩れていった。

2 八島先生の授業を受け継いで

八島先生は1976年、仙台・向山小学校で4年生の面積の授業を公開しました。かけ算は2年生では「1あたりの数×いくつ分」で学んでいます。「長さ×長さ」という「新しいかけ算」をどのように理解させるかという提案をする授業でした。

縦3センチメートル、横2センチメートルの長方形の面積の求め方で、子どもたちはいろいろな考えを出して討論していましたが、「3平方センチメートル×2」という考えに大多数が賛成していました。八島先生は「一応、先生の負け。きょうは終わり」と授業を終えました。この授業の続きの授

業を聞く機会はなくなりました。

八島先生が亡くなられた数年後、私は4年生担任になり、面積の授業をすることになりました。八島先生の実践記録を再度読み込み、「長さ×長さで面積を表す」授業を進めたいと考えました。

八島先生は指導案の中で、次のように書いていました。

普遍単位に関して（2時間扱い）

方眼のマス目の大きさの違いによって、広さを表す数値が変わることから、『決まった大きさⅡ 普遍単位』を導入します。そのあとで、『1平方センチメートルが2つあると2平方センチメートル』ということから、〇〇平方センチメートルと言いつの練習をし、方眼を使つての面積の数値化の練習をします。

このことが「長さ×長さ」の授業のときに、「3平方センチメートル×2」になったのではないかと、私は思いました。

そんなときに、同僚から「ひとはどれだけのとちがあるか」というトルストイの絵本を見せられました。ひとやうと、欲張りの百姓のパーホムが、一日歩いただけの土地を安い金でもらえると思慮にそそのかされ、土地は取ったが、歩きすぎて事切れるという話である。

そこで、この絵本を用いて導入に使い、直接比較できない土地の大きさから、長さ×長さで面積

を数値化できるプランを考え、授業実践に進みました。単元の流れは次のように考えた。

〈第1時〉面積の定義と、トルストイの絵本を読み聞かせと土地取りゲームの説明
〈第2時〉土地取りゲーム（校庭）
一番広く面積をとったグループは？
周囲の長さで決める？。

教室からみると、周囲の長さでは比べられない

〈第3時〉面積の大きさは、周囲の長さでは比べられないのか？

〈第4時〉長方形を使つて、前時のことを確かめる。
その中で長方形のたてと横の長さによって積の大きさが決まることに気づかせる。

〈第5時〉長方形の等積変形

〈第6時〉面積を表す式を考えよう

〈第7時〉長方形の面積は、たての長さ×横の長さで表されることを、別の方法で確かめてみよう。『かけ・割り器』（線分の移動用に操作する教具）を使つて確かめる。

この授業で、子どもたちは、体全体を使つたり、いろいろな道具を使つたりしながら、自分たちが確かめたことをもとにしながらか、「長さ×長さ」を発見していった。

（仙台・元教員）

子どものつまずきから探り続ける

阿部 誠 喜

八島さんの失敗談を聞く

県教研（現在のみやぎのつどい）の休憩時間に数人で雑談をしていた時のことだったと思います。八島先生が教師になって間もない頃の失敗談として話してくれたことを、今でも鮮明に覚えています。くり下がりのあるひき算に悩んでいた子に、放課後に個別指導をした時の話で、概ね次のような内容だった。

「2-」を下図のようなタイトルで示し、タイトル操作をしながら答えを求めていくことにした。

① 2個から7個は取れないので、1本を変身させて（裏返して）個の部屋にくり下がる。

② このままでは取れないので、変身した10個をバラバラの10個と交換する。

③ 10個から7個を取ると、残りは3個。

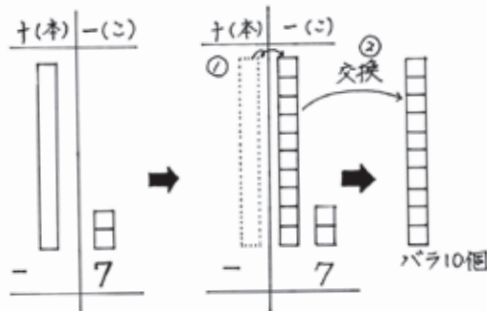
④ この3個とはじめからあった2個を合わせると、残りは全部で5個。

このように何問かを一緒にやって、「分かった?」と尋ねると、小さな声で「分かった」と答えたが、

翌日、学校では相変わらず悩んでいる様子だった。

これは根気強くやるしかないと思いき、その日からも放課後に練習する日が数日続いた。それでも改善された様子が見られず、その子が納得してくれない原因がどこにあるのか思い悩んだ。

そして「もしかすると」と思いついたのが、「1本2個から7個取る」という問題なのに、「1本2個に加えて、交換したとはいえ、両替したバラ10個」も使っていたということだった。バラ10個に交換するというのは数計算上ではどこにも登場しないのだ。



そこで、10個に変身したのから必要な数だけ切り取れるようなタイトルを作って翌日を迎えた。くり下がった後でバラ10個と交換せずに、変身したタイトルからはさみで切り取るようにして数問やってみた。すると、その子の表情が変わるのが分かった。そして元気な声で「先生！分かった!」と言い、笑顔で帰っていった。その日以来、その子はくり下がり計算で悩むことはなくなった。

「俺は、あの子から大事なことを教えられた」と懐かしむような表情で話してくれたのでした。

子どもの可能性を信じて向き合い続けたと同時に、自分の指導を過信せずに子どもが納得できる方策を探り続けた姿に、「教師としての学びの原点を見た思いでした。そして、「自分が発見した」という手柄話としてはなく、「子どもから教えられた」と話す謙虚さに、いつでも相談にのってくれる先輩教師としての親しみを感ずいたのでした。

振り返って考えてみると、八島先生が教師となつて間もない頃というのは、遠山啓氏が量の理論と水道方式に基づく算数・数学教育を提唱し、教育現場での実践が行われ始めていた頃だと思えます。数と計算の仕組みを理解させる有効な教具としてのタイトルも、それほど市民権を得るまでの広がりを見せていなかった時代だったと思います。そのように考えると、今でこそ当たり前と考えられている「両替をしないタイトルの操作」の有効性

に気づいた八島先生のような実践の広がり、後のいわゆる「水道方式ブーム」につながっていったのではないかと思います。

八島先生が県教組教文部長を務めていた頃、機関誌「教育文化」96号の主張のコーナーに『半数の子は授業が分からないか』という小論を掲載しています。すべての子が納得できる授業を創ることを基本姿勢とした実践の積み重ねに裏打ちさ

れたものだけに、今、読み返してみても示唆に富む主張です。

「失敗談？」は、教材の本質に迫る努力もせずに、納得できない理由を子ども能力のせいにして済ませるなど、今でも語りかけているような忘れられない話です。

(仙台・元教員)

面積の授業との出会いの中から

佐々木 光 一

出会い

だいぶ前のことなので、自分の記憶がかなり薄く曖昧で、思い違いや勘違いなどもかなりあると思います。かすかな記憶を辿ってみました。多岐にわたる八島さんの実践の中でも、「長方形の面積」たての長さ×よこの長さ」を子どもたちにとどのように分らせるか？ ということに対して、特に興味を持っていました。私は以前、八島さんが向山小学校で行った授業（数学教室No.284に掲載）を参観する機会を得ました。当時、涌谷サ一

クルの鈴木市郎さんから情報をいただき、私の当時の勤務校である女川の出島から、前日の金曜日に休みを取り、女川汽船に揺られながら島からの久々の脱出に胸を躍らせ、一路、仙台へと車を走らせました。

長方形の面積の授業

当日、会場には宮城教育大学の高橋金三郎さん、中村敏弘さんや、涌谷サ一クルの鈴木市郎さんなど、サークル関係者・研究者がたくさんおられました。私の一番の関心事は、どのようにして子ど

もたちを「たての長さ×よこの長さ」という見方や考え方に高めていくのかということでした。そこに至るには、どのような式にするのかとか、演算の決定をどのようにするのかなど、いくつかのハードルがあります。

授業が始まると、八島さんは子どもたち同士の発言を丁寧に取り組み立てながら、考えをまとめていきました。長方形の面積を足し算や引き算、割り算では求められないという到達点は、この授業の一つの大きな山場であり、「長さ×長さ」という見方・考え方に収斂していく

ための重要な役割を果たしています。授業の中で、「面積はかけ算で求められるのではないか」という所まで進んだ後、八島さんは教具を利用して「長さ」に注目させ、よこの長さやたての長さを変えながらじっくりと考えさせ、丁寧に子どもたちとやりとりをしました。そして、長さを2倍、3倍…すると、面積も2倍、3倍…になることを子どもたちから引き出しました。

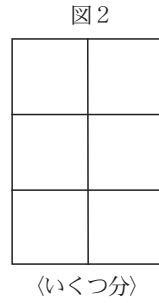


(図1)
〈よこの長さ=動いた距離が2倍、3倍……〉となると。〈面積は2倍、3倍〉になる。

授業の終わりの方で、ある子どももの「前の勉強でやったように、1km走るのに3リットル使う自動車は2km走るといように考えたら……」という発言をきっかけに、議論が盛り上がったのでした。タイトル図を使つての説明でしたが、図の左側

に「1あたり量」(3L/km)、右側に「いくつ分」が並んでいます。(図2) この子どもの発言は、八島さんのそれまでの実践の証を如実に示しているのだと思います。子どもたちにとって、「タイトル図」はかけ算のシエーマとして定着しており、「説明のよりどころ」であり、「重要なアイテム」でした。

「3L/km × 2 km」の式になりますから、これに合わせると「3平方センチメートル × 2」となります。



子どもたちが説明の時に「方眼」を持ち出してきたので、八島さんからは「方眼は使わないでと言ったんだよ」と確認のひと言が出ました。これに対して、子どもたちが何か混乱しているように私には感じられました。その後、八島さんは「それならいいや」と言葉を継ぎました。最後に八島さんが、子どもたちに「3平方センチメートル × 2でいいの?」と問いかけました。すると、子どもたちが「うん」と、微妙な反応を示したこともあつてか、「きょうは先生の負け」と八島さんに言われしめ、授業が終わりを告げたのでした。八島さんは、自分の考えを子どもたちに押しつけるわけでもなく、むしろ、ゆったりとした中で自分の意見を出したり、議論しやすい雰囲気や日々の教育実践を通して、教室の隅々まで行き渡らせていたのだと思います。八島さんの「授業を創る」こと

の思いの一端に少しでも触れる機会が持てたこと、同時に自分の未熟さをつくづく思い知らされたこと、忘れられぬ一日となりました。

中学生と考える

私は中学校の数学の授業を担当していました。が、「長方形の面積」たての長さ×よこの長さを単に小学校での既習事項として扱うことに疑問を持っていました。子どもたちによると、「長方形の面積」たて×よこ」という一言で扱われていて、決して「長さ」という言葉は表に出てこないのです。ということとは、「長さ×長さ」ではなく、「数×数」であり、子どもたちに単位が意識されていないのでは? と、大いに気にかかるところでもありません。式「2÷3」も、「2割る3」と読むのですが、「2を3で割る」という意識で読み取ることが必要です。子どもたちの中には、この筆算をするときに、 $\frac{2}{3}$ というふうな語順に従って左から順に書き、その間違いに気づかないままでもいることもあるのです。

($\frac{2}{3}$) + ($\frac{1}{3}$) を「 $\frac{2}{3}$ + $\frac{1}{3}$ 」と読み、($\frac{1}{3}$) × ($\frac{2}{3}$) を「 $\frac{1}{3}$ × $\frac{2}{3}$ 」と()を省略して読むという慣例にも共通の問題を抱えているのです。このように、言葉での語順と筆算式の場合で違っていたり、「省略・簡潔に」という数学の持つ独特の身勝手さ(?)に子どもたちは困惑しているのかも知れません。これは、日々の授業を通して、子どもたちとの合意づくりが欠かせないことの大事な視点であると

思います。

単位の大切さ

理科の学習で、例えば比重や容積、電気抵抗・電流・電圧の関係などを考える時、「単位」の扱いが重要になってきます。計算式の中の「単位」を省略してはいけません。つまり、数値の計算と単位の計算がセットであり、別々の計算が必要です。このことから考えても、数学で計算をする時、「単位」も省略せずに行われてしかるべきと考えます。しかし学校現場では、数学という学問の性格上、「できるだけ簡潔に」という趣旨の元に「単位」を省略することになっているのでしよう。様々な量の「単位」は、それを見ればどのような演算をしてきたものが分かるような構造になっていると思います。私は、数式の授業の初期の段階では、式をつくる時は「単位」をつけて書くことにしました。子どもたちにもそのことを説明して、「単位」を明記することにしてきました。はじめは、子どもたちからの抵抗はかなりありましたが、徐々に慣れていきました。「単位」をつけることで、式をつくる時にそのヒントになりますし、「たす・ひく・かける・わる」量は何なのかを見つけ、それらの関係を探る上でも大いに役立ちました。

再度、面積の授業を考える

もし、自分があの時の八島さんの立場だったら、どのように授業を続けたのだろうか? と考えてみ

ても、なかなか名案が浮かんできそうにありません。私は教員生活の中で、中学1年を何度も受け持りましたが、「長さ×長さ」については「文字式」の授業でよく扱っていました。例えば、たての長さ3cm、よこの長さ4cmの長方形の面積を求める時、式では「 $3\text{cm} \times 4\text{cm}$ 」と書き、面積の確認は「方眼」で行いました。「数値同士の計算」では「 3×4 」となり、「単位同士の計算」では「 $\text{cm} \times \text{cm}$ 」と考え、それぞれ「12」、「 cm^2 」と求めました。次に、「たての長さをa cm、よこの長さをb cm」とした時、式は「 $a\text{cm} \times b\text{cm}$ 」となりますが、「数値」の部分には「 $a \times b$ 」で、「単位」は「 $\text{cm} \times \text{cm}$ 」として求めます。結果はそれぞれ、「ab」であり「 cm^2 」となるのですが、「 cm^2 」は乗法の指数法則「 $m \times m = m^2$ 」に関連づけ、「 $\text{cm} \times \text{cm} = \text{cm}^2$ 」を説明する時「長さ×長さ」を強調したつもりですが、子どもたちの「意識」の中にどれだけ入り込めたかは分かりません。「ab」は「a」でも「b」でもない「新しい量」であり、「 cm^2 」も同様に「新しい単位」が乗法により生じたものです。「加減」を除く演算は、「新しい量」を創り出す機能を持っています。八島さんの授業でも、面積を求める式の発表の時に、いくつかそのことが確認されていました。

かけ算の一つの意味「1あたり量×いくつ分」から出発して、それとは違う「新しいかけ算（長さ×長さ）」にたどりつくのは、なかなか容易でないと思います。先達が残してくれた実践に確信を

持ち、それらを引き継ぎ、更に深め合いながら残された課題を一つひとつ明らかにして、より確か

な実践を探り続けていきたいと思っています。

(仙台・元教員)

教科教育の未来を描くために

林 和人

私の手元にある「朝日新聞」や雑誌『世界』などでは、「〇〇スタンダード」の流行による授業や学級経営のスタイルの画一化、習熟度別授業による進度の足並みや指導法の縛り、指導要領解説のマニユアル化（算数科が顕著

なく、事細かに指導方法や授業のやり方を指示して教師の主體的な深い学びを妨げる内容になっていると感じます。

による統制、「学力検査」による学校のランキング化と児童生徒の序列化、そして、教員採用試験の受験者の大幅な減少など、公教育の劣化がじわじわと拡がっている実態が報じられています。

そのような劣化や疲弊をどう食い止めたらいいいのでしょうか。

そうした懸念がある中で、2020年4月から「主體的・対話的で深い学び」を標語に三つの観点で評価する学習指導要領による教育が始まります。道徳の教科化・プログラミング教育・英語科・「学びに向かう力、人間性等」の評価などの実施によって、学校現場が今以上に疲弊することは十分想像できます。さらに、私が指導要領算数編解説を読む限り、教師の創造的な実践を後押しするのは

ここで、とにかく「主體的・対話的で深い学び」を実践しようとする、上述のような現状では教育内容の研究はさておきペアやグループによる話し合いを取り入れた授業になり兼ねません。実際、書店の教育書欄には「アクティブラーニング型授業の〇〇」のようなタイトルの本がずらりと並んでいます。ネットで検索しても同様です。どうもこのままでは、即席の「アクティブラーニング」は教育の未来像になり得ないように思えます。

かけ算の一つの意味「1あたり量×いくつ分」から出発して、それとは違う「新しいかけ算（長さ×長さ）」にたどりつくのは、なかなか容易でないと思います。先達が残してくれた実践に確信を

私は、子どもが考えずにいられなくなるような問いをつくること、子どもが発見する授業を構想すること、そして、分かれば分かるほど知りたく

なる加速する授業を実現することを、とりわけ算数教育で心がけてきました。それが実現可能だと確信するのは、数学の基本概念と原理・法則それ自体が魅力的で、子どもたちの肯定的側面を引き出す教育性を算数教材が内包していることを先達と同僚の実践で知ったからです。そして、その実践の先駆者が八島正秋であることを、本特集のための編集会議で気づかされました。

4年生の面積は、一辺が1cmの正方形(1cm)を敷き詰めて縦の個数×横の列数=面積を基にして、数値が同じであることを根拠に縦の長さ×横の長さに置き換えるというのが一般的です。しかし、1cmを前提とせずに乗法性と複比例の関係を基に「長さの積」を子どもに分らせるための指導計画を構想し実践したのが、今から50年以上も前の涌谷サークルと八島正秋であることに驚きました。整数値なら1cmの個数で数えても面積と一致しますが、長方形の辺の長さが小数や分数、まして√のような無理数で与えられたら破綻してしまいます。私も一人の男子児童に「ぼくは、長方形の面積でマスを数えるのが長さのかけ算にどうしてなるのか分からなくてから、算数が苦手になった」と言われたことがあります。子どもの思考は大人が考えるほど幼稚で単純ではないんだと考えさせられたのですが、そのことを十分察知して八島正秋は自分も子どもも本当に納得する算数の授業を追求したのです。それは、学び方ではな

く学びそのものが教師も子どもも発達させることを示しています。

授業で子どもが発見したり、ときには子どもが教師を越えたりする、知的な探検をどうやったら実現できるかという教育の本質的な課題は、その時の指導要領がどうであろうとそもそも難しいことでありその難しさに気づいたときから教師らしい仕事が始まるのではないかと思えてなりません。ここで重要なのは実践を積み重ねながら「教科教育の価値」に気づき、自分のからだを通してその有効性を知ること、つまり教育内容が人格形成に相応しいかと問いつつ、教育とは何かを考え続ける姿勢です。しかし、教育を認知するにはとても時間がかかり、私たちが定年を迎えるまでやっても分かり切らないことだらうとも思います。

八島正秋は数学教育の分野でそのことを探求し続けた教師です。それは本特集に寄稿した方々の論考で明らかになっています。八島正秋から受け取った教科教育のバトンを、少しでも前に押し進めて、これからの人たちに渡すことがサークルの意義であり楽しみでもあります。

(仙台・南小泉)

〔八島正秋 略歴年譜〕

- 1931・10 伊具郡大張村に生まれる
- 1953・3 東北大学卒
- 1953・6 雄勝町大須小に着任
- 1956・9 鳴瀬町小野小浜市分校
- 1957・4 鳴瀬町小野小本校へ
- 1962・4 仙台市西多賀小療養所分校に異動
- 1963・1 宮城県数学教育サークルを結成 宮城県数学教育協議会を兼ねる
- 1963・2 仙台算数サークル結成
- 1964・4 仙台市八幡小へ異動
- 1967・2 実践検討会「倍の複合問題を方程式でとく」(6年)提案
- 1968・4 仙台市向山小へ異動
- 1971・4 宮城県教職員組合専従(教文部長)
- 1974・4 仙台市向山小へ復職
- 1974・6 宮教大授業分析センターの現職教育講座「学校論」に参加開始
- 1974・7 実践検討会「角と角度(4年)提案
- 1975・7 宮教組主催第1回「夏の学校」スタート。企画運営にあたる。
- 1977・4 仙台市荒町小へ異動
- 1981・3 東北通信病院へ入院 休職
- 1982・3 永逝(享年50才)